
夢遊び尽くす死神

トンネル道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢遊び死ぐす死神

【Zコード】

Z2425V

【作者名】

トンネル道

【あらすじ】

主人公は厨二病 それを原動力に2次元他作品の技を執念でいくつか会得 見た目は女で魂は男だがやや女 最強キャラだが、一番強いという意味の最強ではない やや無自覚だが男女問わずモテるこの作品を読む場合、ムシウタburoシリーズを先に読む事を薦める。明らかなパクリ部分があるから。だが後悔は多分しない！！

最後に、これは俺が文字通りの暇潰しと気紛れ、気分転換に創つたやつだから、過剰に期待はしないように注意

天才ルーキー（前書き）

まあ見てつてくれや

天才ルーキー

（海燕）

「どうぞ・・・」

「うん、ありがとう」

「おっ、サンキュー」

茶を持ってきてくれた女性の死神に礼を言い、それを口元に持つてきてする。

ズウ～・・・

あ～茶がうめえ～

「それで考えてくれたかい？」

はあ～やつぱこの話が来たかあ～（・・・）

「もつかい言いますけど、俺は副隊長なんてやりませんからね」

「もつかい言うなよ・・・

残念さが増すじやないか・・・（^__^;）

「俺より先に隊長格に入るべき人なんていくらでもいますって

「義理立てか・・・

まあそれも君らしいところだ

・・・あつ、ところで聞いたかい？」

隊長が突然何かを思い出したように話題を振ってきた。

「何ですか？」

「今年の新入隊員に君以来の天才がいるそうだよ、それも“一人”も」

「俺は天才じゃないですよ・・・（苦笑）」

「その子たちは、たった一年で「真央靈術院」を卒業したそうだ
ん？ 何？」

「一年・・・！そりゃまたすごいつすねー」

「そうだろう

そして、その内の一人の少女は、前にも話した「京楽」が琉魂街
から連れてきたあの子のことだ
この間、京楽と飲みに連れて行かれた時、この事を自慢話に聞か
されてね」

「ああ・・・俺もその子については直接会つたことはないんですけど、
前に京楽隊長と飲みに言つた時、散々親馬鹿ならぬ自慢話を聞かさ
れましたよ・・・

『知つているかい？僕にはねえ、口は悪いけど可愛い天使がいる
んだよ～』

といつぱん詞を一言一句違わず何回も何回もループして聞かされま

した

アレはあの人酔つ払つた時の常套句ですよ（・ー・・）」

本当にアレには勘弁して欲しかつた。何回も何回も聞かされる身になつて欲しい。親馬鹿も大概にしてくれ・・・

「あははは、それは京楽のいつものことだ（笑）」

「で、その天使ちゃんとやぢまやつぱり「八番隊」に入隊ですか？」

「ああ、そうだよ

入隊と同時に席官の座も用意しているらしい
あ、これは単なる親馬鹿だけの話じゃないぞ
歴とした実戦を含めた相応の実力あつてのことだ
歳が若いのには少し難はあるが、まあ彼女なら大丈夫だろ

「へえ・・・そつなるともう一人の天才の片割れもそれに近い実力を持つていることになるなあ・・・

こりや俺の副隊長の座もますます遠退くなあ～
(^ー^)」

「嬉しそうに言つなよ・・・(ーーー)」

（俺）

俺が『BLEACH』の世界に転生してから数十年が経ち、今俺

は当初の狙い通り“死神”をやっている。

その経過までは所々を省くが、俺は「京樂春水」を後見人として「護廷十三隊八番隊第三席」をいきなり任せている。でもあまり嬉しい話じやない。

なぜなら、そのおかげで毎日書類の山、山、山！

初めて知ったよ。席官の仕事は実戦よりもデスクワークの方が遥かに多いって！

前世で『BLEACH』読んでいた頃は、戦闘シーンばかり目が行っていたからこうなるのは予想外だった。

おまけに俺の上司に当たるあの一人は、

女の尻追いかけてたり、エロ本読んでたりで、サボつて溜まつていた未処理の書類が全部俺に回ってくる。

つーか何だよ、そのムカツクサボタージュ。聞いていて殺したくなるわ！

「つーわけで、俺もサボつてます
だあ～つて、ダルいんだもん（^_^）」

書類はまだ未処理なのが三分の一程残っているが、気にしない氣にしない（、 、 ）

俺はデスクワークが続き、久しぶりに天井の下ではなく青空の下を歩けることに、一種の感動を覚えながら、俺は“友達”的な家に遊びに向かっている。

「おお！相変わらず嫌みなくらい大きな屋敷だ」と

俺は屋敷の門は潜らずに“瞬歩”で塀を飛び越え、屋敷内へ侵入。見覚えのある目的の“靈絡”を辿り、使用人や警備員の死神に見

つからないよう、極力靈圧と氣配を絶ち瞬歩で高速移動。

「はつ ブンッ！」「ふつ ブンッ！」「はつ ブンッ！」「

おつ、いるいる。木刀でひたすら素振りとは、相変わらず眞面目一邊倒な奴だ。そんなのを見ていたら、声をかけて邪魔をするわけにはいかないな。

普通にからかいたくなる（^_^）

全神経を使い、瞬歩で気付かれないように横に立ち、そつと耳元に フウッ！ 息を吹いた。このケースを予期して、前もって昼食に二ソニク料理もたらふく食べることを忘れない。その匂いを耳元になぞる快感と共に、オプションとしてプレゼントフォーコー

「アヒヤツ！／＼／＼

普段の彼らしからぬ案外可愛い声が聞こえる、ふふつ（笑）

「く・・・臭！

貴様ア！！ ブンッ！！

俺の友達「朽木白哉」が俺の居た位置に木刀を真横に振り抜く。即、瞬歩で回避。

「よおつ、暇だから遊びに来たわ（^_^）／＼

「毎回毎回私の鍛練の邪魔をしおつて・・・（#、皿、）
今日という今日はもう勘弁ならん！－」

白哉の奴が殺氣立つて木刀を構えた。

と、その時

「ただ今貴様を成ば ボイン つ！／＼／＼

白哉の後ろから“褐色の人”がいつの間にか現れ、わざとなのか後頭部に結構な乳房が当たつていた。

「今度は貴様か化け猫！！ ブンッ！！」

白哉は俺の時と同じ対応で真横に剣を振るうが、あの人は瞬歩すらせずにはかわし、大胆不敵な笑みを浮かべた。

「化け猫とは随分なご挨拶じやのう、白哉坊！」

折角そこにある「遊子」と同じく遊びに来てやつたといつて…」

堀の上に「夜一」さんが威風堂々と立つ。

「黙れ！」

私がいつも貴様らに遊びに来て欲しいと言つた！？

そもそも朽木家次期当主たる私に遊びなど不要だ…」

「そうかのう？」

夜一さんがまた瞬歩で白哉の後ろに移動し、結わえていた髪紐を解かれ奪われた。

それにして流石は【瞬神】。移動した軌跡が微かにしか見えなかつた。それでも本調子の瞬歩ではないのだろう。

「貴様あ…！」

白哉が剣を飽きずに振るうが、直情的な軌跡は夜一さんにあつさ
り見切られ、瞬歩でまた元の位置へ戻った。

「ふはははははーーー

お遊ひとは言え、これでは松木家の将来が思いやられるのう！」

「・・・そこを動くなよ四楓院夜

今から私の瞬歩で「膝カツケン」オワツ！！

俺は隙をついて瞬歩で白哉の背後を取り、両膝で内膝を押してやった。

「ふははははは！」

おな」「である我ら」「うもあしらわれねぬひと」と、あいだてて朽木家の将来が不安じやの「べー」。

夜一さんの口説を真似て、夙食をついで怒りに震える白糸は告げた。

「朽木白哉！敗れたり！！ ザシッ！！

直ぐ様、俺たちは瞬歩で退避。

またなう白哉！暇があつたらまた遊びに来るわー

余程私の怒りを買いたいと見える・・・

私の瞬歩が、貴様らのそれをとうに超えているといふことにな!

！ ドゥツー！

「・・・さて、茶でも飲むか・・・・・・」

三人共、終始この

人が居たことに気付いていない（笑）

天才ルーキー（後書き）

あー、ちなみにこの作品は処女作だから。温かい目で見て勘弁な。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2425v/>

夢遊び尽くす死神

2011年10月8日20時56分発行